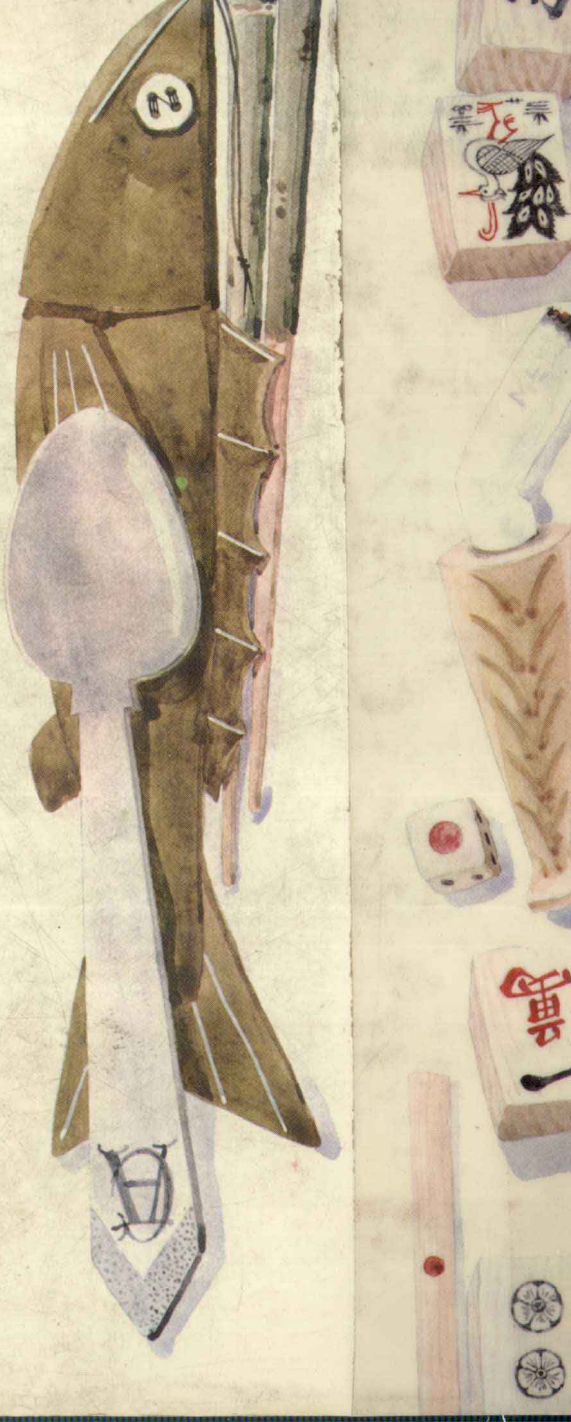
シベリヤの記

北本一等兵に春はこない

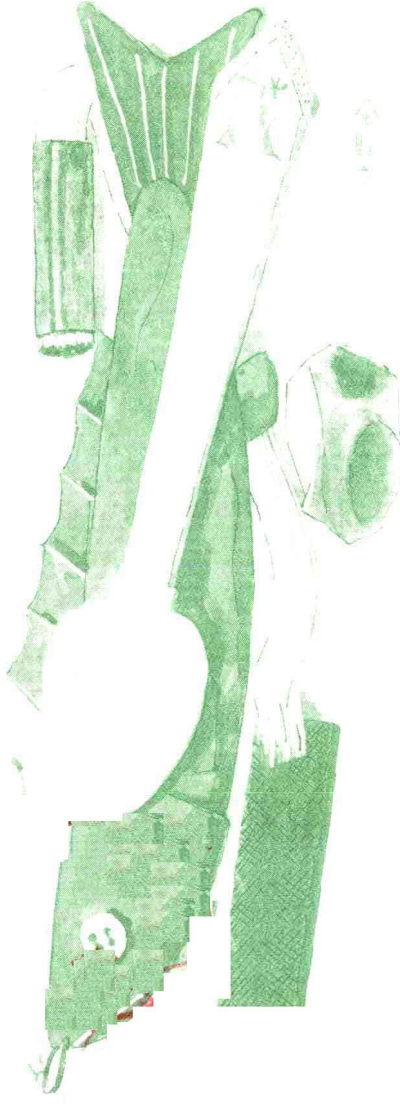
荒木忠三郎
〈強制収容所帰還者〉



ハリヤの記

北本一等兵に春はこない

荒木忠三郎



光人社刊

北本一等兵に春はこない

昭和57年9月10日　印刷
昭和57年9月20日　発行
定価1200円

著　者　荒木忠三郎
発行者　川島　裕

発行所　株式会社　光人社

東京都千代田区九段北1-9-11
電話・東京（265）1864～7
振替・東京7-54693番
本文印刷・慶昌堂印刷株式会社
色彩印刷・有限会社興伸社
製　本・松栄堂製本所

乱丁・落丁のものは本社またはお買求めの書店でお取りかえします
ISBN4-7698-0187-4　C0095　¥1200E　2241

「北本一等兵に春はこない」目次

第一章　旅愁の人
私は永遠に忘れない……8
失意のはてに……12
夕陽しずむ西へ……17
第二章　バレイの霜
捕虜生活の第一歩……26
重労働のはじまり……32
死の恐怖にたえて……40
飢餓の中の飯上げ……45
ダモイの望みなく……52
第三章　風雪のラーゲリ
かすかなる光明……58
苦心の新聞づくり……65
文化部への訪問者……73
千五百分の一の自由……78
第四章　墓標の丘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たおれゆく仲間たち……85
しのびよる影法師……95
洗脳活動を直視しつつ……105
馬鈴薯の収穫時がきても……114
悲しき二百の魂よ、眠れ……122
吹雪の中の別れ……127

第五章　エロフェイの月
あらたなる試練……132
オーカー病棟の一日……134
絵筆にささぐ感謝の祈り……138
わがスポンサーたち……144
細工物のたのしみ……150
シャミリオンのしらべ……156
三たび貨車はいく……163

第六章　ナホトカの闇
うちくだかれた希望……170
偶像と文化と画家と……178

ささやかなる幸い……187
ある一つの感動……192
おさえがたき望郷の念……197

第七章　タイガの流浪
十ヵ月ぶりの再会……203
極寒の大樹海に立つ……207
東奔西走の日日……213
過酷なノルマとの戦い……216
岩崎班長の手紙……219
戦友の涙をこえて……221

終章　雪とけのない春
拝啓スターリン閣下どの……226
とどけ、わが想い……229

北本一等兵に春はこない

——シベリヤの記

北本一等兵に　春は来ない
少し下唇をつき出して
布をまとわない胸の上に
若い奥さんの写真をのせて
ツンドラの下に眠りつづける
三十余年　夏が来ても　来ても
バレイは永久凍土の丘

北本一等兵はしゃべっていた
少し下唇をつき出して
お前たち勝てると思っているのか
竹槍で飛行機を落とすってのか
冗談じゃない　ばかな戦争さ
俺たちには　明日はないんだ
これ　うちのやつの写真　みてくれ

北本一等兵はしゃべっていた

少し下唇をつき出して
お前たち帰れると思っているのか
永久にシベリヤで奴隷だよ
日本のことなんか忘れっちまえ
すっぱい黒パン齧って　こき使われて
骨が粉になったら　捨てられちまうのさ

北本一等兵に　春は来ない
少し下唇をつき出して
俺にだって　故郷が無いわけじゃない
うちのやつの写真だけが
三十余年　胸の上にのっている

凍土の丘　夏が来たら
土の隙間からはい出して
魂だけが　うろうろするのさ
螢のように

第一章　旅愁の人

私は永遠に忘れない

出発の朝が来た。広場に集合したわれわれ千五百名の兵隊は、新京郊外・南嶺の兵舎をあとに、目的のわからない行進に出発した。

隊列が新京駅のある西に向かうことは、当然考えられることだ。

よく舗装された大同大街も、駅に近づくにつれて、見覚えのある街並みになってくる。九月（八日？　カレンダーを見ることが皆無だったのでさだかでなかった）に入っていたのか、立ち並ぶ街路樹も、ようやく黄ばみはじめていた。

道の両側には、われわれの行進を何事ならんと、街の人がたくさん立ち止まって見送っていた。私は、その人々の列を喰い入るように見つめ、知った顔を探しもとめた。もし、だれか知人が私を認めたら、この時点までは、私がぶじであったことや、それからどうなったかについて、やがては家族に伝わるかもしれない。

そのはかない望みの綱も切れて、新京駅の前までくると、部隊は左に曲がり、駅の構内に入って貨物列車のかたわらで停止した。三十輌ほどの三十トン積み有蓋貨車が、茶褐色の姿を長々と横たえていた。かつて満鉄の誇りとした貨物列車は、もはや、われわれと同じ敗残の身としか感じられない。

われわれは、手際よくソ連兵に貨車の中に追い込まれた。指揮をしているソ連将校の、黒いズボンに幅広の赤い筋が入っていたのが、めずらしくて、印象に残った。また、列車の北側では、出発前の息をととのえている機関車のつぎの車輌に、使役が一斗樽をたくさん積み込んでいた。

まもなく、荒々しく扉が閉ざされると、外から錠がおろされ、二、三度、ガチャガチャと揺り返しがきて、それを最後に新京に別れをつげ、列車は北に向かって動き出した。

詰め込まれた貨車の中は、まわりに荷物を置いて座ると、足を伸ばすことができないほど窮屈だった。正座するか、あぐらをかくかして、自分の場所を確保したら、前後左右がびっしり詰まって、もう自由な身動きは許されない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どうしても小便の我慢ができなくなった者は大変である。みんなからぶつぶついわれながら、天井近くの四隅にある小窓の下まで進み、よじのぼって逆さになり、下半身を窓外に出して、なんとか用事をすませるのである。

箱の中に押し込められていると、小窓はあるとはいうものの、手拭ぐらいの大きさの空しか見えないので、列車がどのあたりを走っているのか、見当をつけることもできない。

もう秋の陽が落ちかけてきたらしく、夕焼けが悲しく燃え上がりはじめている。前の方から、列車のぶつかり合う音が伝わってきて、がくんと停車した。

どこの駅だかさっぱりわからないが、停車中に、ごうごうとすれちがって南下してゆくソ連軍の輸送列車があった。戦車か砲をつんで、その上に群がりあふれているソ連兵たちの夕陽を背にしたシルエットは、貨物列車の轟音をも圧するような、軍歌の大合唱につつまれていた。

もう互いの顔もさだかでない箱の中で、私は以前に、独ソ戦の映画の一場面として、こんな情景を見たような気がしていた。

ついに、われわれは運命の分かれ道、ハルピンに来た。というのは、われわれは北上している間に、自分たちの行き先について、いろいろ語り合っていた。

列車がハルピンまで行き、東に向かって牡丹江方面に向かうなら、まだ希望がなくはない。綏芬河からソ連領にはいって、ニコリスク、ウラジオストックから日本へのルートが考えられるからだ。が、西に向かったら、これは満州里からソ連領で、助かりっこない。北に向かって、黒河に行くとしたら、ことは少々おだやかではない。

それでも、まだアムール河を渡って、ブラゴエシチェンスクからシベリヤ鉄道に出て、ハバロフスクを経てウラジオストックに出るのではないかという、希望的観測にしがみつく者もあった。これは、なにかの事情で、朝鮮や大連を通ることができなくなった場合でなければ、考えられないルートである。

だから、われわれにとってハルピンは、生死を分ける重要な地点なのだ。

また、みんなが無理矢理に、日本へ帰るルートの話に明け暮れていたとき、私はそれと違った考えにとらわれていた。それは、私が幼いころから満州で育ち、内地のことをあまり知らないからだと思うが、こんな状況になっても、家族が内地へ送還されたり、内地で生活してゆくということが、考えられないのである。

もし、自分が日本に送還されたら、実感として、故郷のように思っている満州に帰るのに、またどんな困難をおかさなければならないだろう、と思ったりしたのだ。

ともあれ、ハルピンに停車した貨車の隙間から見える広大な駅の構内は、気味がわるいほどに静まりかえっている。遠く駅舎の付近で清掃をしている、数人の日本人らしい人影を見た。日本人がそんな仕事をするなんて、このような敗戦という事態にならなければ、とても考えられない奇異な現象であった。

われわれの箱のそばに、一台の機関車が徐行してきて、やっと声がとどく距離になったとき、私は機関士に声をかけてみた。だが、その機関士はなぜか、いままでの日本人同士のようではなく、なにかをはばかるのか、われわれの行く手については、語ってくれようとしなかった。それでも彼の言葉の端から、われわれより先に、いくつかの列車が通過したことがわかった。

まもなく、箱の扉が開けられ、しばらくの間、石炭がらをふくんだ土の上に、われわれは解放された。なつかしい街のたたずまいが、深い樹々の間にあった。

ハルピンは、白樺の木立の多い、静かな街であるが、満州の都市の中でも特異な街で、白系露人を主とする多種多様な人種で構成されていた。建物も道路もロシア風で、市中のいたるところに建っている寺院は、一つ一つの形式がちがっていて美しい。

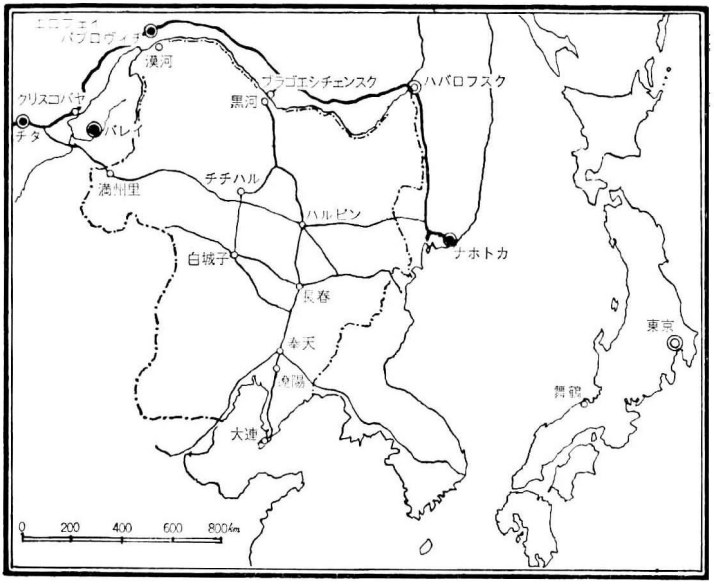
私は、いつかはこの寺院を、片っ端から描いてみたいと思い、ぼつぼつそれを実行しはじめていたところで、戦争に巻き込まれてしまったのだ。

想いはかけめぐるが、しかし、それをのんびりと、眺めていることもできなかった。ソ連兵のなにやらわからない怒鳴り声の中で、あわただしく飯盒炊爨にとりかからなければならなかった。横になることができず、一日一晩中、座りつづけてきた下半身が、自分のものとも思えない。

せっぱつまった運命の岐路に立って、静かに列車は動き出した。見えるものは、手拭形の空だけで、ポイントでのガタガタやカーブの横揺れでは、どこに向かって走るのか見当もつかない。

前の方から橋梁にさしかかる音が聞こえ、われわれの貨車も、たちまち橋梁の上を走りはじめた。はるか橋脚の下を、松花江の濁った水が流れ下ってゆくのが、扉の隙間から見える。

万事休すである。ハルピン駅を出てすぐ大きな橋梁を渡る



のは、浜北線を走っていることになる。この列車は、やはり北安から黒河に向かうつもりなのだ。あとはブラゴエシチェンスクからシベリヤ鉄道に出て、右に向かうことを祈るしかないと、みなはうなずき合った。

「右だなんて、ここまで来て、冗談じゃないよ。お前ら、あれだけ勝つんだと言っていた戦争に、たったこのあいだ負けたばかりで、まだそんなこと考えてんのか。虫がいいってのか、人がいいってのか……どうせこうなりゃ、シベリヤで強制労働さ。一生帰されるかどうかわからないんだぞ」

北本作治一等兵はいつもの調子で、吐き捨てるように言った。彼は三ヵ月前、われわれが遼陽の部隊に入隊したとき、第四班の部屋の窓際に屯ろしていた。一年ほど前に召集された組で、年は三十ぐらいか。背は低い方だが、がっしりした体格で、太い眉と度の強い近眼鏡、それと何でも悲観的なものの見方をするのが、インテリのにおいをふくめていて、他の者と変わっていた。

当時の日本は、敗戦の色濃い状況であったから、一般社会でも戦況については、傷口にふれるような言葉は慎しまなければならなかった。まして軍隊内では、日本敗戦論などとんでもないことである。だが、北本一等兵は遠慮なしに、それをやってのけていたそうである。

「こんなことでは、アメリカの科学兵器と物量に、とうてい太刀打ちできるものではない」
と述べたてて、班長や下士官、中隊長の前でも譲らなかったという。
われわれが入隊したときは、そのための長い迫害の生活に耐えた体を、養っていたところだったのかもしれない。上層の機関からも、要注意人物とされていたらしい彼は、戦勝に否定的なわれわれでもはらはらするほど、戦争に対する日本軍を批判した。
彼は入隊前は、防毒マスク製造会社の技師だったそうで、化学が専門であるために、よけいにアメリカと日本の国力の差を、感じていたらしい。もうすぐ、日本はアメリカに負けること、軍隊の装備と教育が、非科学的でなっていないことを、こまごまと述べたてて、
「いまごろ、お前ら老頭児（ロートル）を引っ張り出したって、なんにもなりゃしないよ。鉄砲も弾丸もないのに、B29と竹槍で、けんかになりますかってんだ」
まあ、引っ張られたからには、せいぜい頑張らなくちゃと思っているわれわれも、内心では彼の説に、いちいち賛成せざるを得なかった。それから今日まで、刻々に変わってきた情勢の中で、彼の予言だけが、不幸にして、的中してきたのであった。

*

北本一等兵は、その後、抑留地バレイにおいて、不運にも坑内作業にまわされていた。あるとき、私はラーゲリの白い壁に寄りかかって、日向ぼっこをしている彼に出会った。
「坑内ですってね、がんばって下さい」
「もうおしまいだよ。やはり、帰れないんだなぁ」
それからあと、いつごろ、彼が死をもって不帰還の証しとしたのか、私はわからなかった。そのとき、彼が上衣に毛布を縫いつけた、不細工なものを着ていた姿を、私は今も、いや永遠に忘れない——。

失意のはてに

さて、われわれは窮屈な車内で眠れない長い夜を過ごし、朝になると見渡すかぎり、まるで人家もなにもない草原の中に停車して、ソ連兵に追い立てられながら、排泄と食事づくりをする。そのたびに感じる外気の涼しさは、もうこの列車が、よほど北上していることを示していた。

本部から糧秣受領の声が伝えられると、班から出た三名ぐらいが、米と麦と副食をもらってくる。残った者は飯盒炊爨の竈づくり、水汲み、薪あつめだ。麦飯、みそ汁、塩鮭か牛罐、それに、近くに畑でもあったら徴発だ。農民にしてみれば、野武士に襲われたようなものである。

こうして慌ただしく、われわれは飢えを満たす間もなく、また貨車の中に追い込まれ、旅をつづけたのである。

ところで、私は貨車で運ばれるのは、これがはじめてではない。ソ連の参戦により、八月十日ごろだったか、わが部隊が急遽、遼陽から北上したとき、私は生まれてはじめて、貨物列車に乗せられたのだ。

戦線に出動するわれわれの列車は、新京から満蒙国境の防衛基地であるハロンアルシャンに通ずる鉄道がクロスする白城子駅（四平街とチチハルの中間）で、われわれの本隊（チチハル駐在の師団）が、侵入したソ連軍のために、国境地帯で壊滅的な打撃をこうむったとの情報を受けた。そこで、われわれは新京の警備に向かったが、新京に降りたったときには、すでに日本は敗戦をむかえていたのである。

やがて昭和二十年八月三十一日、われわれは、駐留していた新京の南にあたる孟家屯の、向陽女学校を出発して、東郊外にある満州国軍の南嶺兵舎に向かった。じりじり照りつける日射しの中にも、ふと忍びよる秋を思わせる人気のない広い道路を行軍したのであるが、その途中で会った私の元の勤務先の同僚二人は、「いますぐ隊列を離れるように……」とすすめてくれたが、私は、「もう二、三日したら、大威張りで帰れるから……」と、断わってしまった。不幸にも、それが、娑婆との別れになったのである。

南嶺の兵営に到着すると、すぐに全員が広場に集められ、はじめて見る数人のソ連軍人の指揮で、携帯品をほとんど取り上げられてしまった。

そして、南嶺での数日間の生活がはじまったのであるが、われわれ五、六名の現地召集兵は、練兵場の向こう側に並ぶ空き兵舎に集まって、情勢を検討した。

関東軍が、一般の在留邦人を放り出して真っ先に逃亡し、日本軍の防衛力がまったく失われたとすれば、われわれ現地で召集された兵は、即刻、軍隊を出て妻子のところに帰り、自分たちだけでも、家族を守らなければならない。なんとかしなければ、無防備の家族たちは、なにを奪われ、どんな不幸に突き落とされるかわからない。

しかし、われわれは年齢も三十歳前後といったところで、社会ではそれぞれの職業について、働き盛りであったが、軍隊では三ヵ月にもならず、申し訳のような教育しか受けてい

ないし、日本がかつて遭遇したことのない事態に直面している現在では、それはまったく、蛙が井戸の中で相談しているようなものであった。

いままでにも、脱走がなかったわけではないが、焦り、いらだちながらも、われわれがある決断に踏み切れないのは、今日まで吹き込まれてきた鉄の軍人精神、軍律への恐怖のゆえにほかならない。憲兵の権力はまだ生きているかどうか、ということが問題なのである。

しかし、結局はだれからともなく、「脱走すべきである」という意見に落ちついていった。そして、島野と原が代表になって、中隊長の西田中尉に会い、脱走について了解を求めること、今夜の消燈二時間後、つまり十一時半に北門に集合すること、脱出後は新京市内に潜入し、若山の家にいって民間服に着がえること、などを打ち合わせたのであった。

夕刻、中隊長に会った二名の代表は、やや失望した面持ちで報告した。

「中隊長は賛成はしてくれなかったよ。しかし、絶対に禁止する、とも言わなかった」

われわれは、それは中隊長の立場として、賛成を求めるのは無理であろう、黙認として決行すべきであるとした。

九時半になると、その夜の不寝番の編成が発表されて、消燈ということになる。不寝番は、いままでは初年兵と召集兵を一組にして、一時間交替になっていた。ところが、その夜は初年兵だけの編成で発表された。

これは、中隊長が逃げようとする者を、編成から除いて脱走を援助する意味か、逃げる心配のない初年兵だけに監視させて、脱走を妨害する措置なのか、われわれには判断がつきかねた。

初年兵は、若年ではあるが、すでに三ヵ月の第一期教育を受けており、われわれ召集兵より階級は上とされていた。本格的な兵隊として、血の出るような猛訓練に耐えぬいた初年兵と、兵隊言葉で員数にすぎないわれわれとでは、気持の上でも別々のグループであった。

だから、怪しいことを考えている連中を監視するのには、彼らだけの編成にしなければならなかった、とも思われるのだ。

やがて消燈になり、異常な興奮でいらいらしながら、私は周囲の寝息をうかがっていた。十一時二十分になった。……不寝番の監視をのがれて戸外に出たが、われながら、案外うまくいった。

外は、黒煉瓦の幾棟もの兵舎と、柳の老木が、まったく音のない闇の中で、息をこらすように立っている。私は壁に身

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com